その身を以って守る者

後ろ向きに全力疾走

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その身を以って守る者

【Ｎコード】
Ｎ２５５６Ｚ

【作者名】
後ろ向きに全力疾走

【あらすじ】
ある日、突然に幼児へと戻ってしまった主人公。迫り来る致死量の不幸から生き抜く為、彼は一つの賭けに出た。

壁伝説の幕開け（前書き）

「この小説は、主に私と楯守の愛を語ら――」

「違うから。お前は向こうに行ってなさい、話が進まないから」

「えっと……この小説は、楯守さんが死にたくないが為に人間を止め――」

「止めないからなっ、絶対に止めないからな！何で、お前らは真面目に話を進めようとは思わないかな！？」

「それは、その……」

「正直に言ってやれ、刹那」

「……分かった。楯守さん」

「ぅおっ、おうっ？」

「馬鹿らしいからに決まってるじゃないですか」

「……もう、やだ。何でこいつ等がヒロインなの」

壁伝説の幕開け

負けられない、そう思ったのは一度でない。何度も、何度も、そう思いながらも敗れてきた。敗れて、折れて、腐敗して、それでも尚負けたくなくて立ち上がった。

時にはトラックが衝突し、時には鉄骨が降り注ぎ、時には山岳に架けられた橋が落ち、幾度となく死にかけてきた。無事だった事など皆無、何時だって死ぬ一歩手前まで陥っていた。

不幸だ、そんな一言で済ませられるような事ではないけれど、それでも彼は負けられない。何度だって立ち上がる、それが彼に出来る唯一の誇りだから。

何かを為すには、それ相応の過程が必要である。錬金術で言うならば、等価交換。つまりは、努力に付随する結果だ。

負けられない、自分の目的を果たすまでは。

「意地に懸けて、ダチは守ってみせる……ッ！！」

それが、先を知る者、異世界転生者としての、彼の意地だ。

だから、絶対に負けない。彼は、負けられない。

ある日、目覚めた彼は子供だった。夢や冗談などではなく、本当に子供となってしまっていたのである。二十歳を目前にして、何をとち狂ったかと思われるかもしれないが、青年とも言えた彼の身体は見事に幼児となってしまっていたのだ。

驚愕が過ぎれば思考も止まる、暫くの間、彼は呆けたまま自分のベッドで在る筈の場所で時を過ごした。しかし、変化は一向にやってはこない。現実なのだと受け入れてしまったのは、そう遅くはない夜である。

思考が停滞を止めれば、次にしなくてはならないのが状況の把握だった。勿論、一番最初に把握しなければならない事は自身についてだ。何処か見覚えの有る部屋に設置されていた姿見、その前に立って自らの全身を映し出す。

顔は、曾ての自分。細くもなく、太くもなく、自他共に認めた地味な造形である。次に身長ではあるが、二十歳を目前にしていた自分と比べれば、巨人と小人ではないだろうか。横に大きくなるか、縦に大きくなるか、今後の生活次第だろう。

此処までは、アルバムの写真でも見れば懐かしがるような所だろう。しかし、一か所だけ、曾ての自分には無かった箇所が存在していた。

額から頬にかけて薄っすらと走り、右目を縦に両断する傷痕。メスのような鋭利な刃物で切られたものとは違う、爪――そう、獣の爪で引き裂かれたような傷跡である。

上から下へとなぞり、下から上へとなぞる。肉を抉られているのか、傷痕は少し陥没し凹凸を持っていた。何が遭ったのか気になるが、あまり追求してはいけないと予感がしたので諦めるしかない。

「何か、朧気だけど……記憶――いや、これは記録か？そんなのは有るんだけどなぁ……」

これがまた、役に立たない。昨日の晩御飯は美味しかった、一昨日は怖い夢を見て泣いた、そんな日記擬きの記録しか見当たらなくて状況が判断出来ないのだ。僥倖と言えたのは、自分の名前が楯守(たてもり)身(しん)であると分かった事くらいか。

名前に異変が無いので、過去に戻ってしまったかと思ったものの、右目に走る傷痕を思い出して首を振る。過去ならば、この右目に走る傷痕が存在していない筈なのだ。

一瞬、エヴェレットの多世界解釈が頭を過り、違う世界の自分というものが想像出来た。ある意味、非現実的ではあるが、一番現実

的な考えである。
過去に戻っているという考えの時点で、既に非現実的だという事を彼は気が付いていないけれど。
と、母親らしき声が彼を呼んでいる。彼は姿見から離れ、扉のノブを回して部屋から出た。ノブを回すのも一苦労だったが、大凡理解はした、この身体は五歳の頃である。
うんしょ、うんしょ、などと掛け声を掛けながら階段を下りて一階へと降り立ち、リビングへと向かう。こうなってしまう前と家の構造が変わらないので、迷う事無く母親が居るであろう場所には辿り着けた。
母親に異常は無い、若返っている分、むしろ好都合だろう。無論、彼には関係無い事ではあるが。

「晩御飯にしましょ？今日は、身ちゃんの大好きなハンバーグなのっ」

一言言うと、もう如何でも良いや。
右目に走る傷痕以外に相違点は無いのだし、気にする事も無いだろう。そう思って、人生をやり直せる良い機会だと納得した。
だが、それが甘かった。
保育園に通っていた頃は、よく転ぶ程度だったのだが。小学校へと上がった途端、転べば、その先には階段が待ち受けていて転げ落ち。給食を運んでいれば、後ろの奴が鍋を引っ繰り返して、それが頭から被って火傷を負い。登下校の途中には、トラックが突っ込んできて、轢かれはしなかったものの撥ねられて全身複雑骨折。
既に不幸とか言っていられる状況ではない、病院のベッドで身は、そう判断した。
さて、これから如何生きていけば良いものやら。と、思い悩んでいた彼の前に、一人の男性が現れた。
高畑・T・タカミチ、そう聞いた瞬間、彼の頭は真っ白になった。

何故ならば、その名前は漫画の登場人物であり、実在する筈は無いのである。
不意に、エヴェレットの多世界解釈という言葉が再び頭に浮かび上がって、そんな世界も有るのかもしれないと思ってしまった。思ってしまったものだから、思わず口にしてしまった。

「魔法で俺を助けられます？」

「――ッ！！」

驚愕だろうか、その一言を聞いたタカミチは優しそうな笑みを崩して、観察するような瞳で身を見詰めた。

（うん、考え無しに馬鹿な事した。これ、絶対に目ぇ付けられたよなぁ……。っていうか、俺が住んでる場所が麻帆良なんだから、少しくらい予想してても良い気がするんだけど……常識的に考えて無いもんな、漫画の世界に飛び込むなんて）

苦笑いを浮かべてタカミチの顔を見る身ではあるが、タカミチからすれば色々と思考を巡らせなければならなくて大変である。
本来、魔法の存在は秘匿されなくてはならない物であり、例え存在を感じていても、それをピンポイントで関係者に聞くのは確率的に低い。であるならば、身は魔法の存在を知っていて、尚且つタカミチが関係者と知っている可能性が多大であると思っても仕方が無いであろう。
だが、身は普通の子供にしか見えない。無論、本当に普通の子供なのだから、そう見えて当たり前なのだ。
学園長に話を持って行くべきか、とタカミチは思考したが、その思考を他ならぬ身が遮った。

「親父と御袋は関係無く、魔法の存在は知っています」

「……如何して、と聞いても良いかい？」

「如何して、とは言えないかなぁ。知っているから知っている、そうとしか言えない」

『魔法先生ネギま！』なる漫画を読んでいたから知っている、などと言っても信じてもらえるとは思えない。むしろ頭を心配されて、黄色い救急車を呼ばれ兼ね無くて怖い。

咄嗟に、そう判断して、限りなく嘘でない答え方で身は返したのである。

逡巡するように考えたタカミチだったが、身が置かれている状況を考えると、彼を救う事が出来る。その逡巡の考えが、タカミチに行動を取らせた。

「何か事情が有るのかもしれない……だから、如何して君が魔法の存在を知っているのかは聞かないよ。でもね、残念な事に魔法じゃあ君を助けられない」

タカミチから言い渡された現実に、身は打ち伸めされて項垂れた。しかし、捨てる神あれば拾う神あり。次にタカミチが口にした言葉で身は俯かせていた顔を上げて、彼の顔を見上げた。

「でも……僕が君を鍛え上げて、ちょっとや、そっとじゃ死なないようには出来るかもしれない」

俺は神を見た、と言いださんばかりの表情で身はタカミチを見ている。魔法障壁などを覚えられれば申し分無かったが、我儘は言ってられない。むしろ、タカミチに鍛えられるという事は戦えるよう

になるという事である。男として、それは嬉しいものがあったのだ。
断る筈も無く、身は迷わず頭を下げてタカミチに頼んだ。死なないように強くして下さい、と。
それが、壁伝説の始まりだった。
退院した後、休日にはタカミチが迎えに来て、目隠しをされて何処かへと連れて行かれる。そこは周りが果てし無く続く海に囲まれた、何やらリゾート地のような場所で。そこでタカミチによる鍛練が与えられ、先ずはと身体作りから始められた。
行き成り戦闘訓練させられる訳ではない事に安堵していたのだが、それは早過ぎた。休みながらでも良いからとはいえ、腕立て伏せを五百回、次回は腹筋を五百回、更に次回は十分の休憩を挟んで三十分間のマラソン。はっきり言って、小学三年生にやらせる内容ではない。ないのだが、それが次第に結果として現れて来るのだから疑いようもないのだ。
一年した頃には、それらが苦にもならない、むしろ当たり前になってしまっていた。当然、死にたくない身の必死さも有るが、タカミチの指導が丁寧なものだった事も起因している。
身体を限界まで苛めるが、しっかりと休ませる。これによって、身体は無理無く筋力を増量していく。筋肉が硬いと成長を阻害してしまう為に柔軟も行い、身体作りの要たる食事も疎かにはさせない。これによって身の身体は憚り無く成長し、体格も良くなっていく。
小学五年生になる頃には、身は大分体格の良い少年となっていた。

「よし、今日からは僕が持つ全てを以って身を鍛えていくよ」

「……え、今まで以上に辛くなりません？」

「じゃあ、止めておく？」

無理強いしない、此処がタカミチの良い所である。しかし、辛く

なると分かっていても身は断れない。
だって、死にたくないから。
「――お願いしますッ！」
「良い返事だ！それじゃあ、先ずは――」
壁伝説は、その基礎を作り上げた。
「受け身を忘れるなッ、受け損なえば死ぬぞ！！」
「うごッ！？」
トラックに撥ねられた時のような勢いで投げ飛ばされ、受け身を取る毎日が続き。
「よし、良いぞ！その調子――調子に乗って隙を見せるな、命取りだぞッ！！」
「はぐッ！？」
組手をしている途中で調子に乗り、頭に拳骨を落とされる毎日が続き。
「今日は休みだし、ちょっと出掛けようか」
「よっしゃあっ！」
偶の休みに、遊びに連れて行ってもらう。
そんな一年だったのだが、その一年で身は一人の少女と出会った。

それが、タカミチが保護者を請け負っている神楽坂（かぐらざか）　明日菜（あすな）であった。
偶にの休日、遊びに行こうというタカミチに誘われて了承したのだが、迎えに来たタカミチの車の助手席、そこに彼女は居た。何やらむくれているし、身を睨んでいるようにも見える。
確か、漫画の中の彼女はタカミチを好いていた。それを思い出した身は、タカミチと出掛けられる折角の機会に、自分というお邪魔虫が入ったからだと納得する。納得するが、だからと言って誘いを今更に断るつもりは毛頭無い。
修行に明け暮れる毎日に訪れる休息、それを手放すなんて馬鹿だ。

「……何睨んでんだよ」

「――ふんっ！！」

外方を向かれ、出会いは最悪であった。だが、そんなものはお構い無しと、タカミチに連れて行かれたレジャー施設で身は思いっ切り遊んだ。何度目になる頃からだったか、明日菜が常に横に居るようになった事を気にもしない程。
ただ、仲が悪くなくなったものの、仲が良くなった訳でもない。色々と話はするが、口喧嘩だってする。

「はあっ！？アンタは高畑先生を、どんな目で見てんのよ！！」

「あん！？命の恩人に決まるぷぁッ！？」

口喧嘩してる時に車が突っ込んで来た時は、流石の明日菜も驚いて茫然としてしまったが。一年と少し、タカミチに鍛えられてきた身である、無傷ではないものの、軽い擦過傷程度で済むようになってしまっていたものだから、彼女には呆れられた。

そんな一年であったが、翌年、つまりは六年生になった頃。タカミチから技を教えられるようになり、修行は更に過酷さを増した。しかし、弱音を吐く事は有っても、決して途中で逃げ出したりはしなかった。

最近、車が向かって来ても躱せるようになったのだが、代わりに鉄骨が降って来て当たるようになったのである。要は、死にたくないから必死なのだ。

そして、中学生となった春、壁伝説は幕を開けた。

「ちょっ、そこの地味な仲間！あぶなぱぁっ！？」

「ちょっ、誰が地味な仲間――ぴいいいぃぃっ！？ひ、人が轢かれたーっ！」

「くそっ、油断してた……」

「えっ、い……生きてる？嘘……でしょ」

ある時は、轢かれそうになっている少女を助けようと駆け出した瞬間にトラックが突っ込み。最悪の一歩を踏み出そうとしていた少女は驚きで振り返って、自身を轢こうとしていた車を躱し。

「危ねげはあああぁっ！？」

「ゴールに人が押し潰されたーっ！？」

「くっそ……、また油断してた」

「ちょっ、え……ちょっ、嘘でしょ？」

ある時は、バスケットボールが頭に当たりそうになっている少女を助けようとして、壊れて降ってきたバスケットボールのゴールに押し潰され。危険な一歩を踏み出そうとした少女は驚きで振り返って、頭を撃ち抜こうとしていたバスケットボールは素通り。
一体何が起きているのか、少女達自身は何も知らないが、それを見ていた者達は皆が語る。

――アレは、代わりに事故ってるようにしか思えない

不名誉とは思わないが、嬉しくない。
更には、タカミチから夜の警備員なる使命を言い渡されたのだが、そこでも同じような事が起きているので笑ってられない。

「余所見するなぱぁっ！？」

「ちょっ、楯守さーーーーーん！？」

「痛いだろ、こんにゃろうっ！！」

「……この時間だと、あの薬局だったら開いてたな」

剣道少女が鬼に殴られそうになっているのを助けようとしたら、後ろから殴り飛ばされ。それに驚いて振り返った少女は、自分を狙う鬼の一撃を寸での所で躱し。何故か無傷で反撃する身の姿を見たスナイパーな少女は、最寄りの薬局が開いているかを考える。
そんな日々が、此処最近は続いている。
付けられた渾名が、身代り。酷いものとなると、囮。
涙が止まらない、明日菜に慰められても全然と涙が止まらない。
何が悲しくて囮。好きで、こんな目に遭っている訳ではないのに。
と、明日菜に泣き付いたら、彼女にしては優しく宥められた。

そんな毎日が続けば、嫌でも顔見知りは増える。特に此処最近は、放課後になると何時も一緒に居るメンバーが決まってきた。

「今日こそ倒して見せる――ネッ！！」

「会って早々に殴り掛かるんじゃねーッ！！」

褐色の肌に、セミショートな明るいクリーム色の髪が印象強い中国娘、古（クー）菲（フェイ）。強者を求めて中国から留学してきたらしく、その実力は確かである。武術で身体を動かしているので身体は引き締まっているものの、ちょっぴり残念な大きさの丘を二つ持つ少女だ。

「あの、今日こそは私の身よりも自分の身を気にして下さい……」

「うん、ごめん。悪気は無いと思うんだけど、それ言われると凄く落ち込む」

白い肌に、左側でサイドテールに纏め上げられたセミロングの黒髪が印象強い剣術娘、桜咲（さくらざき）刹那（せつな）。何やら深い事情が有って京都から転校してきたらしいが、その訳は未だに話してもらえない。クーと同じく武術で身体を動かしているので身体は引き締まっているものの、やはり残念な大きさの丘を二つ持つ少女である。

「私の事は良いから、自分が怪我しないように気を付けろ」

「……はい」

褐色の肌とストレートロングの黒髪、おまけに三白眼が印象強いスナイパー少女、龍宮（たつみや）真名（まな）。中東アジアの出身らしいが、今は龍宮神社の養子としてすごしているらしい。やはり身体は引き締まっ

ており、しかし前述の二人とは違って、中学生らしからぬ大人びた雰囲気とナイスバディのクールビューティーである。
　勿論、明日菜も放課後には一緒に居る事が多いが、美術部に所属している彼女は他よりも頻度が少ない。
クーは中国武術研究会に所属している為、所構わず勝負を仕掛けて来るし。夕方を過ぎて部活が終わる頃からは、夜の警備員として刹那や真名と一緒に行動する事が多いのだ。その為、付き合い的には明日菜が一番長いのだが、誰が一番仲が良いと聞かれれば悩む。

「っと、そういえば、この映画を見たいと言ってなかったか？」

「ぁん？おっ、よくチケットが手に入ったな」

「超経由さ。それより、今度の日曜日は空いてるのか？」

「空いてる、空いてる。んじゃ、何時もの店で昼飯食ってからだな」

　真名とは、それなりに映画を観に行く。何せ、好みが似通っているので、一人で行くよりも当然の如く盛り上がるのだ。その前後で食事をするのだが、真名が映画のチケットを手に入れてくるので、それは身の払いである。
　周りからしたら、それは仲睦まじい恋人同士のデートにしか思えないのだが、本人達は一切、そう思っていない。

「……あ、楯守さん、この前に言っていた件なんですけれど」

「この前？……ああ、買い物手伝えってやつか。やっぱ、無理か？」

「いえ、お嬢様の護衛は葛葉先生が代わりをしてくれるとの事なので大丈夫です」

「……何か、地雷踏ませた気がする」

刹那とは、此処最近になってから漸く間が狭まりつつあった。最初の頃は足手纏いに思われ勝ちだったのだが、幾度か身を挺して庇っている内に、彼女の方から歩み寄ってきたのである。

ただ、歩み寄る切っ掛けが怪我の手当てというのが、あまりに情けないと真名は思っていた。切っ掛けは兎も角、友人である二人が仲良くなる事に問題は無いと彼女は笑う。

「何だ、楯守。私の前で浮気をするつもりか、んっ？」

「……じゃあ、今度の土曜日だな。そっちは如何だ、部活とかは休みか？」

「相手にしないんですね……。はい、土曜日なら部活も休みですから大丈夫ですよ」

「相手にすると付け上がるぞ、こいつは」

「……何だろう、一人で真面目にしてるのが馬鹿らしくなってくる」

身の発言に何やら不満が有るらしく、ちょっかいを真名が彼へと出し始めて、二人は攻防を繰り広げ始めた。それに呆れ果てて、何時もならば引き締めている表情を崩して刹那は苦笑するのだった。それが、この三人の何時もである。

楽しい、凄く。だから、と身は思う。

守りたい、この暖かい日常を。この世界で生きるようになってから碌な目に遭いはしないが、それこそ負けてられない、死んでなんかいられない。だって、こんなにも楽しい日常が明日も待っている

かもしれないのだから。
　漫画とは違う形で未来に進むかもしれない、自分というイレギュラーの為に悪い方へと進むかもしれない。しかし、それでも身は、この世界に生きている。明日菜やクー、真名や刹那、他にも多くの友人知人達が存在する場所に、彼は存在してしまっている。なら、出来る限りの事をするしかない。何もしないで、ただ傍観する事など出来ない、我慢が出来ない。せめて足枷になってしまわない程度に強くなって、皆の背中を守りたい。

「さあ、団体様のお着きだ。龍宮、桜咲、準備は万端か？」

「はいっ、何時でもいけます……！」

「ふっ……、楯守こそ」

　出来過ぎた話ではあるけれど、幼少の頃からの不運で死に難い事は分かっている。だから、その身を楯に。

「オラオラオラァッ！！テメェ等の攻撃程度じゃあ、死ねねぇんだよおおおおぉッ……！！」

「ちょっ、だから一人で突っ込まないで下さいってば！？」

「刹那、心配するよりも先に敵を片付けろ……そっちの方が早い」

　守ってみせる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2556z/

その身を以って守る者

2011年12月9日00時51分発行